

## スポーツ少年団の育成

子どもたちが、毎日、自然に大勢で集まって、思う存分、からだを動かして遊ぶ—そんな時代は過去にあった。大人がほっておいても、子どもたちは、走ったり登ったり戦ったりして遊ぶことで、勝手にからだを鍛えだし、年齢の違う集団のなかで社会性を身につけることができた。

かつてのような子ども社会を、少しでも復活させることはあきらめてはいけないと思うが、現実的になかなかむずかしい。男女とも、少人数でゲーム、というのが、どうしても、遊びが主流になっている。そんな昨今、昔の集団の外遊びの効果や快感に近いものがあるとすれば、スポーツかもしれない。

学校とは違う人間関係で、複数の子どもたちと知り合えるというのは、スポーツを習う、大きな利点の一つだ。また、学習塾や文化系の習い事と違い、ともにからを動かして交流することで、親近感や開放感が生まれやすいと思う。

坂東市のスポーツ少年団は（野球・サッカー・ミニバス・バレー・剣道・少林寺・柔道・空手道・ハンド）の9種目が日々活動を行っています。

スポーツを苦手な子どもに強要するのは論外だが、何か興味が持てるようなら、親が勧めてみるのは、いいことだろう。続くか続かないかは、どのみち子ども次第なのだ。続けられれば、一つ、貴重な自分の世界を手にいれるかもしれない。



親子でバーベキューを楽しむ（坂東市スポーツ少年団）

積極的な体験活動の導入でより確かな結束力や気遣いを学ぶ

長生JVDスポーツ少年団（徳島県阿南市）

団員、指導者、保護者が一丸となって活動する

「こんにちは」

元気いっぱいの挨拶と笑顔で迎えてくれた子どもたち。長生JVDスポーツ少年団は四国最東端に位置する徳島県阿南市で1985年に産声を上げた。

創設当初からのスローガンは「一人はみんなのために、みんなは一人のために」かけがえない団員一人ひとりを大切にすること。そして、一人の努力が全体のレベルアップにつながり全体の思いが一人を支えること。そんな団を目指して日々活動に励む。そのためには礼節も重要で、挨拶やマナーに関しては特に厳しく指導している。

「バレーボールはそこまで上手でなかったとしても、挨拶に関しては阿南市で一番だと思っています。どのスポーツ少年団の監督さんもその点は褒めてくださいます」

冒頭の挨拶もそうだが、練習中も「お願いします」「ありがとうございます」といった言葉がこだまする。決していわされているのではなく、子どもたちが自分の意思で発していることが伝わってくるからこそ、活動中の雰囲気よさが感じられる。

体育館には小学生に混じって中学生や高校生の姿も多い。今ではバレーボール以外の競技に精を出す者もいるが、大会前には「ボール拾いだけでも」と顔を出す。

「時ジュニアリーダーの講習会に参加するなど、団の活動にとっても協力的でうれしい限りです。ゆくゆくは指導者として団に戻ってきてくれたら最高ですね」

協力的なのは保護者も一緒。日頃の活動のサポートはもちろん。認定員の講習会にも積極的に参加してもらっている。新しい情報。正しい知識を得ることで、団の指針をよりハッキリさせるためだ。「保護者の目が厳しく、確かなものになることによって、わたしたち指導者も気が引き締まります。いい相乗効果が得られます」

## さまざまな体験活動が子どもたちを育む

長生JVDスポーツ少年団では、バレーボール以外の体験活動を積極的に取り入れている。現在は年2回、自然体験活動を実施。子どもたちの新たな一面も垣間見られるだけでなく、子どもたち同士の結束も深まるそう。また今年2月には、地震を想定した防災訓練と災害食体験を行った。「もし大きな地震が発生したら、大会や練習試合の主会場となる市の体育館（サンアリーナ）は津波が到達する可能性が極めて高い。学校では訓練していますが、校外での訓練はこれまでになかったので、今のうちにやっておこうと考えました」

そうして、相談を持ちかけた市のスポーツ振興課の協力により、市内のバレーボールスポーツ少年団4団体との合同訓練が実現した。今後も東日本大震災の被災地から避難してきている子どもたちとのふれあいや、四国八十八所巡りの「お接待（巡礼者に食べ物や飲み物など無償提供がなされる伝統）」などさまざまな体験学習を模索中。こうした未知の体験が、子どもたちをさらにたくましく成長させることは、間違いない。

## 東山スポーツ少年団（名古屋市）の紹介

この団体は「剣の理法の修練による人間形成の道である」剣道。稽古は礼と黙禱で始まる。刺し子の道着に袴を着けた小さな剣士たちが、並んで正座（静座）をし、目を閉じると、静謐な空気が流れる。が、その後は「遊び」の時間。明るい道場に、子どもたちの元気な声が響き渡る。対象者は、小学1～4年生の部の稽古時間に「遊び」を組み込んでいる。

「1時間のうち30分ちかくを、遊びにあてるので、もちろん竹刀を使った練習は減りますが、そのメリットは十分すぎるくらいにあります」と同少年団指導者は語る。

遊びに興じながらストレッチ効果や持久力、巧緻性アップが狙えるようデザインされたプログラムは、準備運動の役割を果たし、協調性や創造力を養える。

「リーダーとして手伝いに来てくれる中学・高校生のお兄さん、お姉さんたちとだけでなく、剣道の稽古も一緒にするなど、交流の密度が高まって、子どもたちは剣道の技量が向上、この30分の「遊び」がもたらす恩恵を強調する。

## 子どもたちの可能性を引き出す

はじめに

「スポーツ基本法」においては、国民の誰もが自主的にスポーツを行う権利（スポーツ権）をもっており、あらゆる場面においてこの権利の確保が図られる必要があると明文化されています。これらのことは、様々なライフステージやライフスタイルにおいて、スポーツの多様な楽しみ方を享受し、それを継続できる環境づくりが求められていることを意味しているといえます。

スポーツと出会い、仲間とかかわり、それを継続していく機会を提供することは、スポーツ指導者の果たすべき重要な役割の1つといえます。



坂東市サッカー少年団（低学年）

### 楽しさによる動機づけの重要性

運動遊びやスポーツを「する・しない」二極化傾向に拍車がかかっているといわれる昨今、子どもの時代は、生涯にわたってスポーツを楽しむための心とからだの基礎を培う大切な時期です。まず子どもたちに「やってみたい」と思わせ、実際にやってみたら「面白い」と感じ、それを「続けたい」という欲求につなげていくことが求められます。

## 基礎的な動きを身につけることの重要性

人間の動作（動き）は、日常生活に必要なものから、運動遊びやスポーツを楽しむために必要なものまで多岐にわたります。本来、子どもは日常生活や様々な遊びを通して多くの動きを自然に身につけていくものですが、今の子どもたちを取り巻く環境は必ずしもそれを保証していません。

体格は大きくなっているものの、それをコントロールする能力が低下しているという現状は、スポーツ活動に消極的な子どもに限った問題ではありません。積極的にスポーツを行っている子どもたちにも、日常における身のこなしや取り組んでいるスポーツ以外の動きの不器用さが見られることや、特定のスポーツ種目に偏ることによるオーバーユース（使いすぎによるケガ）の問題なども指摘されています。

また、子どもたちの成長の進度には個人差があります。同じ年齢の発育が早い子どもと遅い子どもを比べると、体格だけでなく運動能力にも差がみられる傾向にあります。児童期に行われる球技系種目の選手選抜においては、4～9月生まれの子どもがより多く選ばれる傾向にあるなど、生まれ月による偏りも問題視されています。

## からだを動かしたくなる「場」の重要性

運動遊びやスポーツは、身体的、精神的及び社会的な恩恵をもたらすといわれますが、そのための「時間、空間、仲間（三間）」を今以上に確保することは容易ではありません。したがって、「地域、家庭、学校（園）」それぞれが持っている「限られた三間」のなかで工夫をこらして、その活動の質を高めることがまずもっての課題といえます。

子どもたちが活動的になるか否かは、子どもたちを取り巻く人的環境、すなわち友達や保護者、そして教師や地域の人々との関係で決まるといっても過言ではありません。したがって、元気で活動的な子どもを育むために必要なことです。